

掲載号・キーワード・執筆者	内容
<p>その3 (ニューズレター No.65 2011.6.17)</p> <p>「地球の陸と海を分けるもの」</p> <p>執筆：荒木</p>  <p>堤防高 7.5mの海岸堤防(計画潮位 5.02m)</p>	<p>「低平地」という言葉は佐賀の人には既に聞き慣れた用語となっていますが、低平地防災研究センターを作った当時は話し相手の頭に随分多くの？を灯したものです。外国でも同様に lowland と言ってもなかなか通じませんでした。L と R を正しく発音できなかつたからだろうという指摘は概ね正しいのですが、それでもイメージしにくい言葉だったようです。</p> <p>その低平地と言う言葉が平成 23 年度センター試験の地理 A と B の問題に出ています。出題は佐賀平野を題材としたもので、設問中に出て来ます。全国的に普及した証のひとつでしょう。</p> <p>低平地は一応陸地なわけですが、今回、津波に襲われた東北地方沿岸低平地の様子を見て海と全く同じだと痛感しました。有明海湾奥では、朔望平均満潮位（新月と満月の時期に起こる最高潮位）は 2.66m とされていますが、標高がそれ以下の陸地面積は 200km² と広大なものです。一方、有明海には滞筋があり、つまり干潟に川が流れているわけで、潮がない状態ではまさに陸地とも言えるわけです。</p> <p>そのような自然特性を有している低平地と自然の驚異を見直せば、防災や環境についての考え方を再構築しなければならないのかも知れません。</p>
<p>その4 (ニューズレター No.66 2011.9.16)</p> <p>「軟弱地盤」</p> <p>執筆：末次</p>	<p>軟弱地盤 (soft ground) とは「建造物の基礎地盤として十分な地耐力を有しない地盤」を指します。地盤上に建造される構造物が求める地盤の支持力、変形や破壊に対する安定性等の機能によって相対的に定義されるものです。「軟らかい粘土＝軟弱地盤」とイメージされやすいですが、構造物の種類や大きさによっては一概にそのように判定されないことに留意する必要があります。軟らかい粘土の他に軟弱地盤を構成し得る土層は、有機質土や緩い砂質土が挙げられます。軟弱地盤と判定された場合には何らかの軟弱地盤対策が施されることとなります。有明海に面する佐賀平野には圧縮性が高く強度の低い粘性土が厚く堆積しています。この地域は、一定規模の道路盛土や河川堤防等の構造物を建設する場合に地盤改良等を適用しなければならない日本でも有数の軟弱地盤地帯です。軟弱地盤に類似した用語で、浚渫土で造成した直後の地盤のように、人も立てない程に軟らかい地盤を指して超軟弱地盤 (very soft ground) という言葉が用いられることがあります。これについては明確に定義されていません。</p>